

# 新報国製鉄

## 焼却炉向け耐腐食合金

### 本格販売を開始

### 「火格子」寿命3倍以上に

新報国製鉄（本社・埼玉県川越市、社長・成瀬正氏）は、2021年度（21年12月期）から「一般材」焼却炉向け耐腐食合金「EGNIS」を本格販売する。

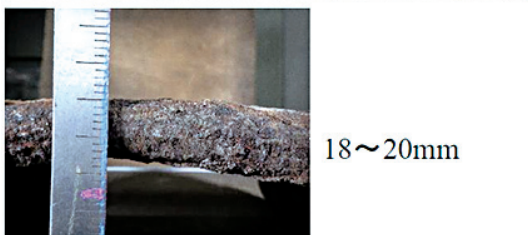
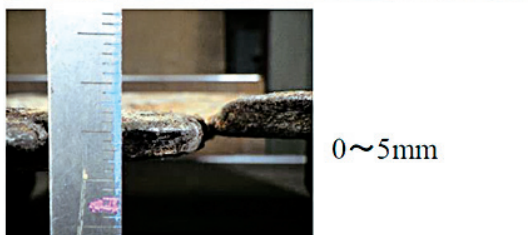
（イグニス）を本格販売する。焼却炉の火格子にEGNISを使用すると、一般材の3倍以上の寿命が得られる。20年に進めた実機試験で性能を確認したため、本格的に販路開拓に乗り出す。将来は年5、6億円の売上げを目指す。

溶融塩腐食は腐食量の増加が早い。一般材を用いる火格子の寿命は1～2年と短い。EGNISは、塩素対して著しい延命化を達成した。焼却炉用火格子の腐食原因である溶融塩腐食に対する有効性を確認するため、20年はラボ試験と複数の工場での実機試験を行った。

この結果、一般材（SCH22、同13、同22）に対してEGNISシリーズが著しい耐腐食性を発揮し、火格子の寿命を3倍以上に延命できることを確認した。また腐食の損傷形態が焼却物、温度、位置で大きく異なることなども実地調査で把握した。

EGNISは合金量（Cr+Ni+Mo）が最も少ない305から最も高い340まで5鋼種ある。今後、炉メーカー、メンテナンス会社、官公庁などにこの用途では一般材に

対する営業活動を本格展開し、使用状況や損傷形態に合った材料提案を行っていく。同社は半導体・FPD（液晶・有機EL）製造装置、各種ウエハ用精密研磨定盤などに使われる低熱膨張合金の売上比率が高く、IT関連需要への依存度が大きい。半導体・FPD製造装置関連は中期で成長が見込まれるが、21年下期から回復基調になり、本格回復は22年になる見通し。主力商品の生産活動が低下している時期を有効活用し、多角的な新規拡販に注力する。



実機試験で火格子の先端部に顕著な差が確認された

焼却炉内で焼却物を移動させる火格子には、一般に耐熱鋳物のSCH13などが使用される。高温状態で燃焼物生成物の溶融塩が火格子に付着するが、

